平成３０年度岐阜県大会

# 生徒講評文

８月　　４日　１校目　　飛騨高山　高等学校

**Innovation**　　（既成・創作）

テーマは題名innovationの訳である「刷新」だと感じた。

この作品は、同じ高校でも科によって桐生校舎と緑校舎に分かれている学校に突如、校舎の統合話が舞い込むシーンから始まる。元々、両校舎の生徒達は仲が悪い為、どちらの校舎をなくすのかもめる。生徒達が各校舎の存続を求めて対決し葛藤の中で次第に両者の関係が修復されていく過程を描いた話である。前半は桐生の生徒が緑の生徒をばかにするという、両者の立ち位置が上下関係になっていたのに対し、後半は徐々に対等な関係になっていくことにより、対立から融和へ向かう様子が分かりやすく表現されていた。

演出では、校長先生の雰囲気をメイクや仕草でうまく表現していた。しかし、塚本先生や坂田先生については、教員らしさがあまり感じられなかったという意見もあった。

キャストは、全体的に会話のテンポがよく、キャラも確立されていた。単に台詞の受け渡しでなく、台詞の持つ意味を理解しながらの演技であった。

照明では実習を見てまわるシーンで各科を単サスで一つ一つ照らし、違う場所への移り変わりがよく分かるようにするなどの工夫があった。

音響では場転の音楽や鳴き声、足音など様々な音が使われており、キャストの動きともぴったり合っており、効果的に劇を彩っていた。

装置では時計の裏が風車になっていてその発想に驚いた。また、ぶどうや椎茸が実際に採れるようになっていたり、アイスの冷蔵庫が開閉できるようになっていたりするなど、舞台装置の緻密さにも魅了された。

この劇から、既成概念にこだわることの愚かさを学んだ。

飛騨高山高校の皆さん、お疲れさまでした。

大垣日本大学高校　片岡千奈理